

第1回 NITS 大賞（平成 29 年度）エントリーシート

兵庫県三田市立上野台中学校 王子明紀

A-14

【活動名】 小規模中学校における授業研究の活性化に関する取組み

解決すべき課題：

小規模中学校では、授業研究の活性化が難しい。その理由は、次の3点である。
教科の専門性があるため、教科の枠を越えた授業研究が難しい。(専門の教員に対して、他教科の視点から指摘することを躊躇してしまう。)
日常の校務の多忙化により、授業公開の時間確保が難しい。(校内全体での研修は長期休業中に行うため、公開授業が難しい。)
授業公開を行ったとしても、参観者が少なく研究協議まで至らない。(他クラスの授業もあるため、参観可能な人数が限られている。)
勤務校においては「生徒の学力向上は教員の授業改善から」という共通理解はなされていたものの、全教員の授業公開を行うのみにとどまっていた。中学校において全教員が授業を公開することは、かなり前向きな取組みと言える。しかし、授業公開をしても改善案の検討をはじめとする研究協議までには至らなかった。このように授業研究をとおした教員の資質向上に関しては課題があった。

目的や背景：

課題解決のために、小規模中学校の校内授業研究を活性化させる方略を構想し、その構想を実践することで教員の資質向上をめざすことにした。さらに現状分析を行い、授業研究活性化のために解決すべき2点の問題を抽出した。授業者にとって成果を感じられない(指導や助言がない。参観者が少ない)こと、参観者にとって時間確保が難しい(見に行きたくても授業がある。見に行っていないので話ができない。)ことである。そこで、「授業者がうれしくなる、授業参観者が授業について話したくなる公開授業」を基本コンセプトとし、普段の職員室の何気ない会話に授業の話題が飛び交うことをめざした取組みを構想し、実践することにした。

活動内容：

授業者が授業公開することに「お得感」を感じ、職員室で授業についての話題が飛び交うためのしかけが必要になる。幸い、全教員が授業公開を行うことに対するコンセンサスはとりやすかった。これは、大きな荒れからの脱却するために「授業が最大の生徒指導」という共通認識で数年間取り組んできたことによる。そして、学校正常化にむけて手応えを感じ始めていた教員に「よりよい授業とは何か」を追求する機運が高まっていたこともプラスにはたらいた。このような校内状況のもと、新たに次の2点に取り組むことにした。授業参観の視点を「ほめる」ことに特化した参観シートによる授業見学の実施、をベースにした研究だより『上中版 仕事の流儀』の発行である。

の「ほめる」参観シートは、授業について話すことのハードルを下げるしかけである。授業の良いところを発見するという目的に特化することで教科の専門性の壁を取り払うことを意図した。参観シートはその日のうちに参観者から授業者に手渡される。それをきっかけに自然と「ここがよかった」「ここがうまくいかなかった」の会話が始まる。参観者はその授業の良さを素直に学び、授業者は自分の授業の改善点を自然に語った。の研究だよりは、教員等中央研修(中堅研修)での岐阜聖徳学園大学教授 玉置崇先生の講義「ミドルリーダーの役割」の学びの成果を活用した。取組み例として紹介された「雑誌風教員紹介」と同じユニットの受講生と共にグループ作業で練り上げた自校の課題解決プランを参考にした。参観シートをもとに、その日の内に右のような『上中版 仕事の流儀』を作成し、少なくとも翌朝には全職員の机上にあるようにした。この研究だよりによって前日に参観できなかった職員も公開された授業に関心をもった。「どんな授業だった？」や「行きたかったなあ」という発言をきっかけに、翌日も職員室で授業に関する会話が交わされた。授業者にとっては、自分の授業が翌日も話題にのぼることで「お得感」を感じるのできるしかけとなった。(『上中版 仕事の流儀』は授業を行う教員のみならず、管理職、事務職、校務担当を含めた全職員の仕事の流儀を紹介した。その一部の縮小版を掲載する。)



活動の成果：

本取組みによって、日常的に授業について語ることができる職員室は実現された。その中でも「教科が違って授業でははずせないポイントは同じやなあ」、「目的が明確であればグループ学習は有効だ」、「〇〇先生の板書構成を取り入れたい」などの発言がみられ、授業改善のポイントが教科の枠を越えて教員の共通認識となった。さらに、社会科の実践で取り入れたジグソー学習を数学科がアレンジして実践するなど、「それ使わせてもらおうや」「それまねさせて」が日常の光景となった。これらの学習方法の交流や情報交換は現在も継続している。また、全教員の授業公開ペースの加速度的な上昇がみられたことも本取組みの特徴である。本取組みでは9月下旬に最初の公開授業が行われ、二人目の公開までは2週間の日数がかかっている。ところが、その後2か月の間に16名が授業公開をし、全教員17名の授業公開が12月中旬に達成された。間に期末考査や成績処理期間を挟んだことを考えると、驚異的なペースで授業公開が進んでいったことがわかる。さらに、研究だよりを見せながらわが子と仕事について語った教員や、大切に額に入れて自室に飾った教員もいたことをつけ加えておきたい。これらは担当の想定をこえた研究だよりの活用事例である。

以上のように、本取組みをとおして小規模中学校の強みである「顔の見える関係」を「授業について語り合える関係」に発展させることができた。

アピールポイント(アイデア)：

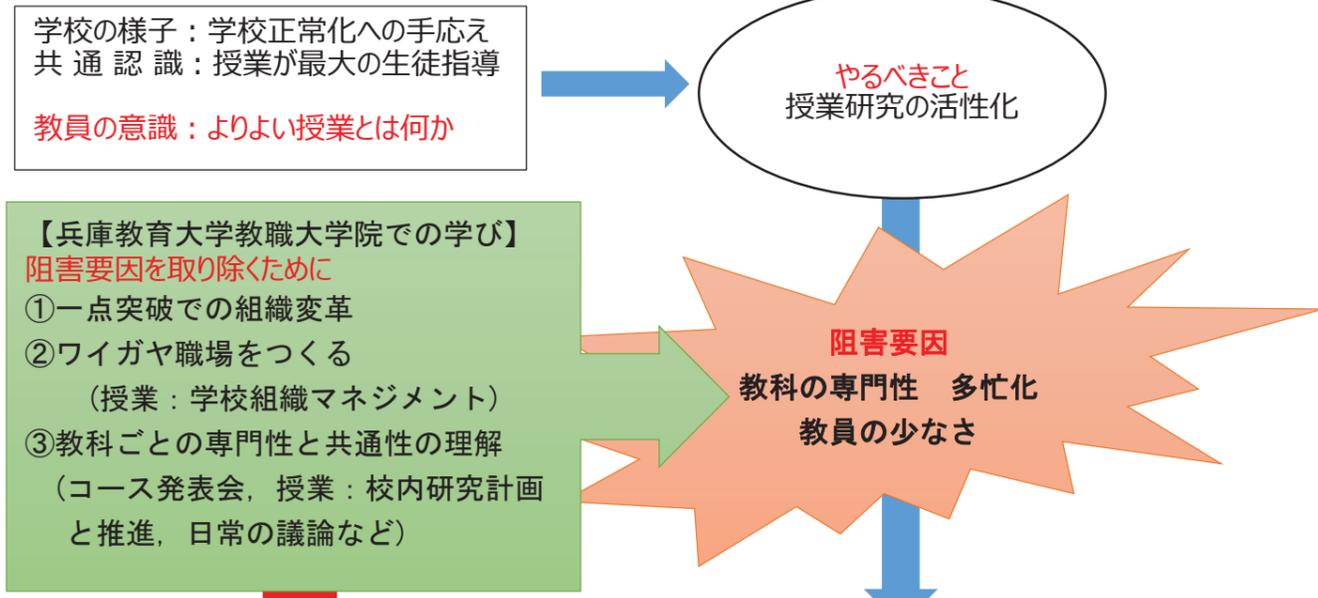
本取組みは、兵庫教育大学大学院(教職大学院)と中央研修での学びをもとに構想した。特に、教職大学院での講義『教員のための学校組織マネジメントの実践演習』において学んだ「組織は一点突破で変える」という考え方とワイガヤ職場をつくることの重要性、教科の専門性と学校種・教科をこえた共通性の理解を大学教員・院生間での議論をとおして学べたことは本取組みの構想の支えとなった。また、中央研修での学びは構想を具体的に進めるための方略を決定する原動力となった。中央研修の講義での学びはもちろんのこと、自分の構想を全国各地の教員と議論し、ブラッシュアップできたことで具体化することができた。このように教職大学院と中央研修での学びを、具体的な実践として学校現場で活用できたことは成果である。

「なぜ、これに取り組むのか」、「この取組みをすれば何が良いか」、「何が変わるのか」を教わるのではなく、教員自らが実践をとおして納得的に理解することで校内研究は活性化するというのが実感である。公開授業の鮮度にこだわり、研究だよりの即日発行を心掛けたことで「授業について話したい」という教員の意欲を高めることができた。楽しくなければ何事も続かない。研究だよりというしかけでなくとも、即時性 真実性(お世辞にならない)に加えて エンターテインメント性をもつしかけが校内研究の活性化には必要ではないだろうか。本取組みは研究のプロセス自体を皆で楽しむことができた一つの例である。

さらに、今年度は大学との連携を新たに図り、教員が教員志望の大学生のインタビューに答えることで自身の教育活動をメタ認知することに取組んでいる。「なぜ、自分がそのように考え、そのように行動したのか」の省察をとおして、教員が教育活動をさらに意図的に進めることをめざしている。

小規模中学校における授業研究の活性化に関する取組み

1 構想(平成 28 年 4 月～7 月)

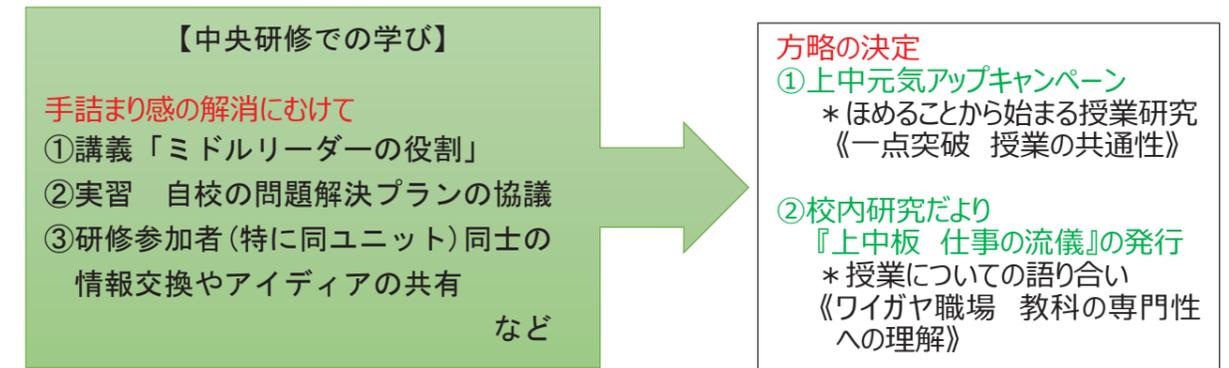


決定事項
全員が公開授業を行う

課題
①どのようにして授業者に「お得感」をもってもらうか
②公開授業に参加できなかった教員にも授業の話題をどのように提供していくか

方向性は出せても、課題解決のための具体的な方略がない時期

2 方略の決定：中央研修における学びの成果(平成 29 年 8 月)



3 実践：上中元気アップキャンペーン(平成 28 年 10 月～平成 29 年 3 月)

(1) 授業参観→授業の参観者は参観シートを記入し、授業者と担当に提出



【授業のよかったところの発見に焦点化する意図】
①参観者が参考にしたいところを授業のよさとして発見することで、教科の枠を越えた授業づくりのポイントに気づける。(共通性の発見)
②授業者が自分の授業のよさをメタ認知するとともに、改善点を素直に話せるようになる。

参観者に名人の称号を考えることに加えて、授業を象徴する写真を撮ることを求めた。このことにより授業の見せ場を授業者と参観者が共に意識する参観になった。

4 参観シートをもとに担当が授業者にインタビューし、『上中板 仕事の流儀』を作成・配布



①参観者から出された名人の称号をもとにキャッチコピーを作成、写真の選定。
②参観者が発見した授業のよかったところをもとに授業の概要の紹介や生徒の反応などを記事としてまとめる(白文字部分)。
③日頃からもっている授業のこだわりなどをインタビューし、記事としてまとめる(黄文字部分)。「このごろはまっていることは？」という無関係な質問もした。参観できなかった場合でも、この答えを話題とした会話がうまれ、そこに参加する形で授業に関する話ができるようになった。

授業後も授業についての話ができる
ワイガヤ職員室がうまれた！